

ぼくだけが
発見した
描きたいの
女のもを

アフロ

1992.6.23



石本正「裸婦」1992(平成4)

アフロティア

石正美術館 ミュージアムニュース
SEKISHO ART MUSEUM
MUSEUM NEWS No. 138
Autumn 2018

◆石本正記念展示室 ◆ 2018年度 「石本正作品選3」より

「石本正作品選」では、青年時代から晩年に至るまでの画業の全貌を、展示作品を年四回に分けて入れ替えながら紹介します。収蔵作品の中から選び抜かれた名作の数々を、ぜひ会場でご覧下さい。

石本正の舞妓

今回の展示作品の中から、昭和四十年に描かれた「舞妓」をご紹介します。

石本が描く舞妓は、最初に舞妓作品を発表した昭和三十五年から約十五年の間に、表現や描写方法に少しづつ変化を見せながら、やがて石本芸術の代名詞的なシリーズとして確立していきました。

本作は、その中でも比較的初期に描かれた作品です。全体的に青系の色調でまとめる画面の中から、青白く浮かび上がる二人の舞妓の顔。これは、月光に照らされているイメージで描かれていました。



「舞妓」1965（昭和40）年

石本の舞妓の姿には、あるイメージが重ねられています。それは、彼が憧れてやまない仏像の姿でした。特に大阪に安置されている秘仏で、外からの自然光と周囲のろうそくの灯りに照られ、薄暗い中にその姿が神秘的に浮かび上がります。石本は、この仏像が年に一度だけ御開帳される機会に、ほぼ毎年のように通つて憧れの仏像を見続けていました。

舞妓の表情だけでなく、青白い月光に浮かび上がる本作の舞妓の姿そのものも、この仏像のイメージと重ねられていました。

彼は、晩年になつて特に描くペースが速くなつていき、「描きたいものが次々

自由な心で



《国宝》如意輪観音像／観心寺

に浮かんできて、忙しくてしようがない」といながら、たくさんの作品を次々に描いていきました。そんな中、絵を描く体力を保つために日課としていた散歩の途中で見かけた樹や道端に咲く花、たまたま植物園や動物園へ出かけた際に興味を惹かれたものなど、これまで描かれた事のないモチーフも次々と作品になりました。

そして九十二歳の時、一年間で五十点近くという驚異的な数の作品を仕上げた年を境に作品数が少しずつ減つてゆき、次第にアトリエに入つても絵を描かない時間を多く過ごすようになっていきました。

彼はずつと、植物が最後に様々な色の変化を見せて終わりを迎える様子を見て「瞬に燃え尽くるように枯れゆく姿が一番美しい」と語り、人間の一生を重ねて花を描き続けていました。芸術におけるこの独自の美学を、自らの人生においても体現したかのようでした。

枯れゆく直前の美しさについて、画家が具体的に語り締に描いた作品「萩」。この絵について語った画家の言葉をご紹介します。

『花は綺麗な時は一瞬だから、それを逃してはならない』と言う人がいるが、ぼくはそう思わない。

萩は満開の時よりも枯れて花が散る直前が一番きれいだと思う。青いところも

あり、実は黒くなっている。実際に様々な色を見させてくれる。その姿は本当に美しい。誰の目にもとまらずひつそりと散つていく。その姿がいい。

この作品は、見たものをそのまま描いたものではなく、自分の心に浮かんだものを描いた。

彼が八十七歳の時の作品です。



「萩」2007（平成19）年

◆企画展示室◆ 石本正素描展「ヴィーナスを求めて」

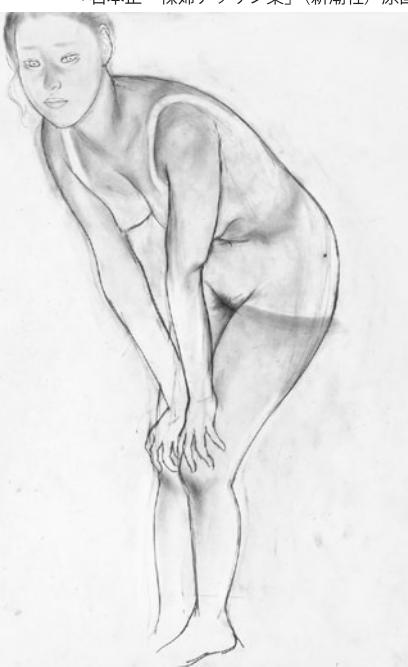


「裸婦」制作年不詳(20代後半～30代頃)

裸婦・デッサン集」(新潮社)が発刊されました。

石本正にとって《女性》は聖なるもの、美しいものの象徴でした。描いても描いても尽きる事のない女性の美しさに対する感動の心。画家のその心は、若い頃から欠かすことなく描き続けたデッサンの中に集積されています。

本展では、画家が最期まで手元に置いていた一万点以上にも及ぶ秘蔵のデッサンの中から、三十代から七十代頃の裸婦デッサンを中心としています。コンテを使つて輪郭を太く描いた印象的な初期のものや、鉛筆の纖細な線と濃淡でやわらかな肌を表現した色香ただよう壮年期のものなど、各年代で画家が追い求めたさまざまな《ヴィーナス》の姿には、女性たちを見つめる画家の鋭いまなざしを見ることが出来ます。



「裸婦」1975(昭和50)年頃
原画
「石本正・裸婦デッサン集」(新潮社)

女性美を表現することを生涯求め続けた石本が、若い頃から欠かすことなく描きつづけた魅力溢れる裸婦デッサン。本展では、アトリエに残されていた1万点以上にもおよぶ未公開デッサンの中から、厳選した四十点を見る事ができます。



「裸婦」(部分)1975(昭和50)年頃
原画
「石本正・裸婦デッサン集」(新潮社)

変化をも逃すまいとする鋭い視線で描かれた膨大な数のデッサンがありました。この受賞を機に、石本が描く《女性美》の神髄ともいえる秀逸なデッサンをまとめ、内容にとことんこだわった画集をつくりうとす

よつて「女体美」を表現したことでした。特に「舞妓裸婦」は、舞妓特有の美しく着飾つた人形のような姿ではなく、あえて裸体で描くことで、彼女たちがさまざまな生活感情をもつて世俗の中に生きる一人の女であることを暗示させました。

これすべての表現の奥に、女たちのあらゆる美しさをつぶさに捉え、一瞬の動きが生じたことは、ごく自然の流れだったといえます。

石本正という画家の目を通してデッサンに描かれた彼女たちは、まるで時間をそのまま切り取つたかのように生き生きとした生命感にあふれています。やわらかな肌の質感やぬくもり、息づかいなども感じられ、今にもこちらに何かを語りかけてくるかのように思われます。

朝の光をあびてモデルの体が婉然とほ、ゑむ。こんなにも美しい体をしてみたのかと、おどろきにも似た感動がありました。体の中を走る。美は自然の内に自己を掘り下げ事により、初めて対象が語りかけてくれる。

横たはる裸婦の足もとから光は動くもの、様に、かげりを與へてくれる。上から下から横からと見る角度により、体の表情は変り、「刻よ止め」と言ふ想ひが寫生してゐる指先から傳はる様だ。

「夢を見てゐるのではないだらうか」ケント紙の上に描かれるデッサンは対象とはうつて變り、あまりにもかけはなれてみじめだ。

観心寺の如意輪觀音・中尊寺一字金輪大日如來像が目の前をよぎる。昔の人はどうしてあんなに造り美しいものを創造できたのか、それが知りたい。賭けはこれからだと思ふ。

◆「石本正作品選3」(石本正記念展示室)
◆石本正素描展「ヴィーナスを求めて」(企画展示室)
一九七七(昭和52)年(平凡社)より

◆「石本正作品選3」(石本正記念展示室)
◆石本正素描展「ヴィーナスを求めて」(企画展示室)
一九七五(昭和50)年、石本正の裸婦デッサン二十一点を収録した「石本正

画家自選・デッサン集原画
当館初公開
一九七五(昭和50)年、石本正の裸婦デッサン二十一点を収録した「石本正

イタリアの旅④ —受胎告知—



階段の先に見える《受胎告知》

かはとても静かで澄んだ空気で満たされている感覚がしました。

この《受胎告知》は私自身も昔から好きな絵で、フィレンツェに行つたら絶対に見たいもの一つでした。館内に入るすぐにぐるりと建物に囲まれた中庭があつて、案内板に導かれるままいくつかの部屋で絵を見て回り、その後二階へ向かう傾斜の急な狭い階段へたどりつきました。一步一歩のぼつて階段の終わりが視界の端に見えてくる頃、ふと顔をあげたときに突如として目に飛び込んできたのが、ドアの向こうに見える《受胎告知》でした。左の方にある窓から差し込む外光に照らされ、まるで絵が光の中に浮いているように見えました。憧れの作品とのあまりにも急な対面に驚いてしまい、一瞬息をのんで足を止めてしましました。

(石本正／画文集『我がイタリア』より)

石本先生がこのように語ったフレスコ画《受胎告知》が、フィレンツエ(イタリア)にあります。この作品は生涯をキリスト教信仰の表現にささげた僧フラ・アンジェリコの傑作で、街の中心地にあるサン・マルコ美術館で見ることが出来ます。美術館の建物はもともと十二世紀に建てられた修道院で、それがそのまま美術館として開放されているということもあって、建物のな

んでした。

聖母マリアが天使ガブリエルより神の子を授かったことを告げられる場面を描いた《受胎告知》。キリスト教絵画ではこのテーマを扱ったものは数多く

見られます。が、フラ・アンジェリコの《受胎告知》はその中でも特に無垢な印象を受ける作品です。質素な白い服に深い紺色のローブをまとったマリアの姿はとても清楚で、処女懷妊の知らせに驚きとも困惑ともどれるなんともいえない表情を浮かべています。色鮮かな天使の羽根以外には装飾的なところがほとんどなく、マリアと天使が見つめあう姿がとても自然です。

この絵の下には『汚れなき聖母マリアのお姿を前にしたら、必ずアヴェ・マリアの祈りをとなえよ』という意味の一文が書かれています。かつてここに暮らした修行僧たちはきっと、私たちと同じように階段をのぼり、この絵と対面するたびに足を止めては祈りをささげていたのでしょう。考えてみれば、フラ・アンジェリコは神への敬虔な心で修行僧の祈りの場の為にこの絵

先生自身は著書で、自分は無宗教だと述べています。ただし美への感動も信仰のひとつととらえ、自らを『美の信者』と表現していました。先生がここを何度も訪れ、階段を登るたびに感動した心は、長い歴史の中で多くの修行僧が抱いてきた信仰の心と全く同じではなくとも、よく似たものなのかもしれません。(学芸員 横山由美子)



天使ガブリエルから神の子を授かったことを告げられるマリアの表情



《受胎告知》がある場所の様子

【フラ・アンジェリコ】 三九五頃・一四五五年
本名グイド・ディ・ピエトロ。彼が描いた天使や聖母マリアの清楚で可憐な風情と、修道士としての謙虚で清廉な生き方から、のちにフラ・アンジェリコ(天使のようない僧侶)と呼ばれるようになった。

光の回廊 2018

いわみの冬至祭



1年で1番日の短い冬至の季節に、光の持つぬくもりや魅力を感じてもらいたいと開催してきた「光の回廊」。

18回目となる今年は、皆さんの自由な発想でできた光のアート作品を広く募集して展示します。陶器や木、石州和紙など様々な素材から生まれる温かな光をぜひ会場でお楽しみください。



【ギャラリー展示】

12/11(火)～12/23(祝)

9:00-17:00 入場無料 【休館日】月曜日

【会場】ギャラリー(終日)、回廊・中庭・前庭(土曜夜のみ点灯)

【昨年の出品作品】



12 December

15 22
(土) (土)

展示室も観覧できます
(観覧料が必要です)

土曜日限定
「夜間開館」
「ライトアップ」
20:00まで



関連イベント

光の回廊コンサート

12/15(土) 18:00～19:00
(開場 17:30)

会場：石正美術館創作室



【出演】ダミアンズ

Damian's

【メンバー】

G Yul Brynner 岡本

Damian 天津

Keith 山根



今年の「光の回廊コンサート」は、浜田市を中心に石見地域で活動するバンド「ダミアンズ」をお迎えして開催します。

ダミアンズは、アメリカン・ミュージックであるカントリー&ウェスタンを中心に、アイリッシュ、ブルーグラス、フォーク、ゴスペルを始めアニメ、唱歌、民謡、ハワイアンなど幅広いジャンルを演奏されてきました。

今回は「オオ・スザンナ」や「サイレント・ナイト」、「アーメージング・グレイス」などが演奏される予定です。光のアートで彩られた夜の美術館で、アコースティックの温かな音色をお楽しみください。



ギャラリー展示

「ゑがくれん 描楽連・一年遅れの十年記念展 「人物を描く・モデルに学ぶ」」

11.23 金・祝
→ 12.5 水

9時～17時 入場
月曜休館 無料



2007年11月に人物を専門に描く会として誕生し、昨年10周年を区切りに解散となった益田市の「描楽連（ゑがくれん）」（通称：ゑ連）。毎月の例会においてモデルを通して人物を学び、会員それぞれの視点で表現してきました。描楽連では、画材も描き方も自由。個性と表情豊かな人物画をぜひご覧ください。



（野田 愛）



（大浴 さより）

ギャラリー展示

「干支展 -2019亥-」

9時～17時 入場
月曜休館 無料
※最終日は15時まで

1.2 水
→ 1.20 日



作品
募集中！

今年1月に開催された「干支展-2018戌-」に続き、来年2019年の干支・亥（いのしし）をテーマとした展示を開催します！新年の幕開けに、石正美術館ギャラリーをおめでたい干支で彩ります。

現在、皆様からのイノシシにまつわる作品を募集中です！詳しくは本誌7ページ右下をご覧ください。

創作教室

ハーブフレーム講座

講師：AEAJ認定アロマテラピーインストラクター
ハーブコーディネーター
小松原 奈穂子さん

11.23 金・祝 1,000円
13時～15時 材料費 要申込み
【定員】10名



ハーブコーディネーター・小松原 奈穂子さんを講師にお迎えし、ドライハーブ、ドライフラワーを使ったクラフトのワークショップを開催。香りを楽しみながら、お部屋に飾れるおしゃれなインテリアを作れます。

創作教室

古布で干支をつくろう -亥-

講師：古布人形作家 木村 喜代子さん

【全2回】時間：13時30分～16時（各回共通）

① 11.24 土 ② 12.1 土

材料費 2,500円（全2回）要申込み【定員】10名

【持ち物】小型はさみ、おしぶり、赤い絹糸、ボンド（布用）、針、まち針

古布人形作家の木村喜代子さんを講師にお迎えし、全2回の講座を通して来年の干支「亥」の古布の置物を作ります。小さなお花や太鼓で飾り、華やかでかわいい猪を作りましょう。



SCHEDULE 石正美術館スケジュール

石本正記念展示室	企画展示室	ギャラリー	ミュージアムパフォーマンス・創作教室
11 2018年度 石本正作品選3	「ヴィーナスを求めて」 石本正 素描展	<p>ギャラリー利用について</p> <p>石正美術館では作品展示の会場としてギャラリーの貸出をしています。グループや個人の作品発表の場として多くの方に利用をいただいています。</p> <p>詳しくは石正美術館までお問い合わせください。</p> <p>利用料：1日 2,160円（税込み）</p> <p>※利用料金は電気代・什器利用代など含む ※当館の展示スケジュールにより日数などの変更をお願いする場合があります</p>	<p>「ハーブフレーム講座」</p> <p>11.23 金・祝 13時～15時 講師：AEAJ認定アロマテラピーインストラクター ハーブコーディネーター 小松原奈穂子さん 参加費：1,000円 定員：10名</p>
12 10.16火 ↓ 12.23日・祝	10.16火 ↓ 12.23日・祝	<p>11.23 金・祝 あがくれん 描楽連・一年遅れの十年記念展 ↓ 12.5 水 「人物を描く・ モデルに学ぶ」 【入場無料】</p> <p>12.11 火 ↓ 12.23 日・祝 いわみの冬至祭 光の回廊 2018 【夜間開館・ライトアップ】 会期中の土曜日（15日・22日）限定 20時まで 【入場無料】</p>	<p>「古布で干支をつくろう -亥-」</p> <p>11.24 土 12.1 土 13時30分～16時 (全2回) 講師：古布人形作家 木村 喜代子さん 参加費：2,500円 定員：10名 持ち物：小型はさみ、おしぶり、赤い絹糸、 ボンド（布用）、針、まち針</p>
1 12.24月 → 1.1火・祝			<p>12.15 日 18時～19時 光の回廊コンサート 出演：ダミアンズ</p>
2018年度 石本正作品選4	「私を感じさせた日本画」 石本正 心の眼2	<p>1.2 水 ↓ 1.20 日 「干支展 -2019亥-」 【入場無料】</p> <p>最終日 1.20は15時まで</p> <p>1.22 火 ↓ 2.3 日 「梅花展 -人生の華-」 新田芳道作品展 【入場無料】</p>	<p>イノシシに 関する作品 大募集!!</p> <p>亥 二〇一九 干支展</p> <p>石正美術館では、「干支展 -2019亥-」開催に向けて亥（イノシシ）に関する作品を探しています。 絵画・彫刻・書・写真・手芸・小物など、イノシシにまつわるものであれば何でもかまいません。また、ご自身の作品でなくても、作品をお持ちの方の情報を寄せただけますと大変よろこびます。ご協力のほど、どうぞよろしくお願いします！</p> <p>【作品募集・搬入〆切】 2018年12月23日（日）まで</p> <p>【連絡先】電話 0855-32-4388 FAX 0855-32-4389 (石正美術館 担当 上田)</p>



SEKISHO ART MUSEUM

利用ごあんない

開館時間 9:00~17:00

休館日 月曜日

(月曜日が祝日の場合開館・翌日休館)

年末年始

(平成30年12月24日(月)~31年1月1日(火))

観覧料 展覧会によって異なります。

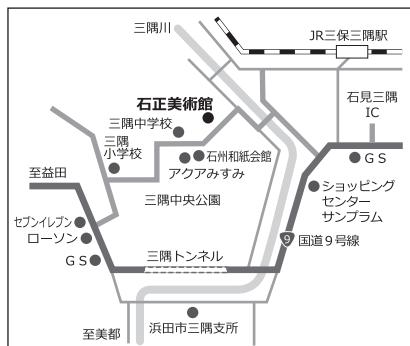
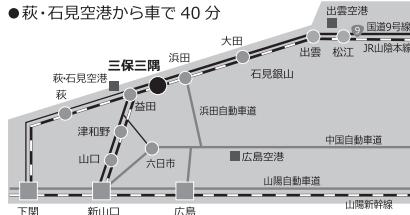
展覧会情報ページにてご確認ください。

※20名以上は団体料金。
※身体障がい者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳・精神障がい者保健福祉手帳・療育手帳をお持ちの方は半額。介助者は無料です。

※「しまね家庭の日」毎月第3日曜日は「しまね家庭の日」(家族連れの高校生・中学生・小学生は無料)。

石正美術館へのアクセス

- 最寄駅 三保三隅駅から車で5分
- JR山陰本線 浜田駅から三保三隅駅まで列車で20分
- 広島駅から浜田駅まで高速バスで2時間
- 浜田自動車道 浜田ICから車で20分
- 山陰自動車道 石見三隅ICから車で3分
- 秋・石見空港から車で40分



石正美術館 ミュージアムニュース

アフロディア

No.138

Autumn 2018

平成30(2018)年11月15日発行

編集・発行 浜田市立石正美術館

〒699-3225 島根県浜田市三隅町古市場 589
TEL 0855-32-4388 FAX 0855-32-4389

Eメール sekisho@mx.miracle.ne.jp

<http://www.sekisho-art-museum.jp/>

石正美術館

f 「浜田市立石正美術館」で検索



石正アフロディア
サポーター通信

サポーター研修旅行

のどあんない

1月13日(日) 日帰り

参加費 11,000円

※バス代・食事代・入館料、保険料を含む
※バス料金高騰の為 参加費が例年より高く
なっています。ご了承ください。

鑑賞するとともに、地方のミュージアムのあり方

を学びたいと思います。
この旅行はサポート以外の方も参加することがで
きます。お誘いあわせの上
お申し込みください。
詳しくは美術館までお問
い合わせください。



申し込み〆切

12月7日(金)

定員30名 (最少催行人数25名)
※人數に達しない場合は中止させていただきます

学芸員
オススメ!

● 奥田元宋・小田女美術館
「生誕100年 堀文子展」

主な見学予定地



「華やぐ終焉」(平成16)年

大正七(一九一八)年に東京で生まれた堀文子は、女性の自立がまだ困難であった時代に画家を目指し、女子美術専門学校(現・女子美術大学)に入学、日本画を専攻しました。在学中から新しい

同じところに留まるよとしました。一九六一(昭和三十六)年から三十三年までわたり欧米やメキシコを訪ね、帰国してからは奈良県大磯へ転居し、日本の四季や風景を澄んだ色調で描くようになりました。その後も軽井沢やイタリアのアレツィオにアトリエを構え、そのたびに画風も進化を続けました。自然への畏敬や生命の不思議に対する感動を持ち続け、独自の感性と表現によって多彩な作品を生み出しました。その後も軽井沢やイタリアのアレツィオにアトリエを構え、そのたびに画風も進化を続けました。自然への畏敬や生命の不思議に対する感動を持ち続け、独自の感性と表現によって多彩な作品を生み出しました。(展覧会紹介文より)

● 辻村寿三郎人形館

日本を代表する人形師・辻村寿三郎の作品を見ることが出来る人形館。平成三十年度後期企画展「スサノオ」を開催中。

● 辻村寿三郎人形館

日本を代表する人形師・辻村寿三郎の作品を見ることが出来る人形館。平成三十年度後期企画展「スサノオ」を開催中。

「できる」と「できない」と「できるときに」でけつこうです。
活動を楽しんで「いだだけける方、お待ちしています。
研修旅行 展示替え 広報 美化活動 創作活動

サポーター募集

三良坂平和美術館は一九八六年に三良坂町が行った非核平和自治宣言を記念し、地域文化への貢献を目的に一九九一年六月に開館しました。ふるさとや平和、自由をこよなく愛した三良坂町出身の洋画家・柿手春三の作品を主に収蔵。今回見学する時期には「自然を描く」というテーマで常設展が開催されており、身近な自然に向かられた暖かい眼差しによって描かれた故郷の風景と草花などの作品を見ることが出来ます。



バックヤード清掃

牡丹の植え付け